

令和元(2019)5.18(土)~5.19(日)

1044 15分 1041 9分 1042 12分 1072 1042-1/3 1042-1/3

春秋左氏 389 東洋史 321 春秋左氏 389 東洋史 321

平王の東遷
成王の時代の一時、鄭、鄆、(中原の周)当初
周王朝は、その後の西周時代、あつたといえ、
都とし、洛邑に成周を東都と定め、周王朝
は、中国を支配した(第4表、第5、6回参照)
幽王(前782)前771の
時、西方の蛮族(犬戎族)の侵入が起つた
が、第十三次の平王(周第十三代の王)前770
年、ついに鎬京の地を「秦」に与えて東遷の
やむなきにいたつた。平王はこの時、かつて
成王が王城とした鄭、鄆に都を遷したよう
に推察される。(第十四章へ中原の王城の変
遷の歴史)「文獻」考察の項において既述
平王(前770)から第二十五代悼王に至る
の十三王は、皆此城に都した。

史記(上)50どうにもなる

1041 未3分 1043 4分

1015 12分

1041 1分 1042-1/3 276

「前記の通り」

終焉 ④1040^{P-1/2}

P 先にも述べたように
④1045^{P-1/2} 199

古代中国の... ④81^P, 81^P ④1060^P, 1044^P, 1043^Pの因
東洋史年811^P

この物語において、

と疑問視される。
近頃の成周(殷民の居住区)へ遷したという
ことか、歴史上、本当にあったのだろうか
と疑問視される。
敬王の成周への遷都
王位を継承した敬王(周第二十六代の王)
前五二の「前四七七」は、いったいどの地に
都を移したのであらうか。
① 平常は、口史記の「
平王立遷于維くわ色辟はく戎寇じゆうこう」
② 「至敬王乃遷成周」
という記事に「たがって、
敬王は、洛邑らくいから成周せいしゅうへ遷った
と考えらる」
「洛邑(宮城)と成周(殷民の居住区)の
二つの城が、ほぼ同じ地域内において二座
別々に経営されていたとは考えにくく」
「第十四章へ「城説」の項において
「敬王が、都を洛邑(宮城)からそのすぐ
近頃の成周(殷民の居住区)へ遷したという
ことか、歴史上、本当にあったのだろうか
と疑問視される。」
「疑問視される。」

史記(史記)
上50^P上
16行

前記

子 元 1451

④ 10³ 3行 (OK)
 在位 }
 三
 二

①1021 左氏401 ①1309 史記(大上)50
①1082 左氏401下 ①1389 左氏389 ①1074-2/2
①1053 同文 ①1685

「王子朝の乱」①1074-2/2 敬王 東洋史辞典 713 史記(大上)50
終止 ①1081-2/2 59 前519年表 小林末の96

前四七七である。
敬王の元年(前五一九)に、晋の人々は敬王を周(周都、郊鄆の王城のことか)に入れようとした。
即位して、敬王は周(周の邑)に居住した。朝がみずから入る。水がすく。
・こうして、敬王と朝との戦いが、長年月にわたって続いてゆくことになった。
(「史記」(上)中国の古典シリーズ、平凡社の周代の系譜。「春秋左氏伝」筑摩書房、三七六頁参考) 五〇頁。「東洋史辞典」創元新社、八一頁の周代の系譜。「春秋左氏伝」筑摩書房、三七六頁参考) 成周城の修復
敬王は成周へ入った。そして翌十二月、敬王は城内の柱宮へ入った。(春秋左氏伝 昭公二十六年条) 六年後の敬王の十年(前五一〇)八月、敬王は、成周に城壁を築こうと考え、伯父簡公に当る晋侯へ使を遣わした。成王は、諸侯の力を合わせ、成周に城を築いて東都となし、文徳を崇べた。

敬王 前520年に即位して元年は前519年なのだろう。

春秋左氏 490の春秋年表にも、敬王元年とある。

史記(大上)50

左氏 401下 167

大カ7/01 75° 人ミシ 丈44 数 1028°
何カナ 丈44 数 スミ
左氏伝 504° 502° 氏

大カ7/83 150° えい 226°
虎 衛 河北省西部
1075° 2/2 1077° 1/3 ひょうけ

227° 南端部とは記さぬ 1086° 7° 17
1085° 6° 165° 4 1045° 原文
1085° P

十九、郡国一に
「雒陽」周時號成周。有狄泉在城中
と記さ小てゐる。「文獻」四参照
* 恐らく、狄泉は成周の中央に位置す
る城「洛邑」の南端部に在ったのであろう、
と想像さ小る。(追つて詳述したい)
この時、魏子(魏献子)が天子(であるかの
南面して坐り、諸侯に言ひわたした。
「魏子にはきつと大きなとかめがあるだろ
う。君の位を犯して大事を命令してゐるか、
その任ではない。云々」
と言つた。
十一月、己丑の日、士弥牟(晋の范氏)の族
が、成周の城(最外郭城の城壁)を検地し
て丈数を計り、城壁の高さをはかり、壁の厚
さをはかり、堀の深さ広さをはかり、土を取
る場所の方角やその遠近をはかり、いつまで
に出来るかをはかり、何人の力が必要かを
かり、どれほどの費用が必要かをはかり、人夫

板 12斤 $\sqrt{12} = 3.46$ $1065 \pm 3/4$
 $\tau = 2.7$ 1.076^P (未)

米

④ $1075 - \frac{1}{2}8$

春秋左氏 403

咸 1081-1/2

128 $(1077^P - 1) / 3$

春秋五代 49¹¹の表

$\sqrt{1082} \approx 32.9$
 $\sqrt{1065} \approx 32.6$

類似記事

そ水にして
は、二、三、

少々不審な点

か
あ
る
。

春秋左伝は、敬王十年（魯国の昭公

二十三年、前五一〇十一月条のおいて述べた

記事と、
ほぼ
同様の
ことを
どうしたわけ

か
翌年の敬王の十一年（魯国の定公元年、

前
五〇九
正月条
において
繰り返
し記載

7
11
3
V

の
で
ある。
(以下
卷頭の
第4表
参照)

こう
う
述
へ
て
い
る
。

定公の元年、春、壬午の

日、晋の魏舒（魏献子）魏子が諸侯の大夫たち

を狄泉に集め、成周に築城しようとした。

子(魏献子)か⁵天¹²子¹²の¹³大夫¹⁴に¹⁵代¹⁶わ¹⁷て¹⁸す¹⁹へ²⁰

て指揮したの
で、
衛の
彪侯
が人に
語り

天子の居城を建てようといふの
水、諸

侯の臣が、位を越えて命令するのは、¹⁵⁶³道義に

反する。大切な事にあって義をおかせは、

769
1340

see!
前々更
ひょうなく

ひょうけい

大カニ
1772
みち

春秋左氏 403^p
云 499²³⁶⁶
云 2629^p
云 29

大 599²³⁶⁶
599²³⁶⁶

必ず大きな咎めをうける。晋が諸侯を失うよ
うになるか、または魏子（魏献子）が助から
ないか、いずれかでしょう。
と言った。
この天子の居城（築城のさい、魏献
子は、工事を韓簡子と原寿過とにまかせ、自
分は大陸という天で焼き狩りをし、新たに晋の
途中、寧の地で死んでしまった。八新に晋の
執政となった。范献子は、魏子（魏献子）を
葬るのに柏椁（はくかく）を使わせなかった。工事が終つ
たという復命もいらないうちに狩などをしたか
らである。
（わが魯国からは）孟懿子が、成周の築城
に参加した。庚寅の日に板圃（いたが）を
築きはじめた。（中略）
築城は三十日間であわり、諸侯の軍隊は帰
らされた。齊（今の山東省の地）の高張（たかちやう）は京
師へ来るのが遅れ、諸侯の築城の役に加わら
なかつた。
晋の女叔寬（おんなしゆかん）は、

1408⁸ 1047⁷ 重複 1458⁸

1077^P-3/3

322⁷ 322⁷ 322⁷

363⁸ 362⁸ 362⁸

363⁸ 362⁸ 362⁸

＊

断言するのはいむつかしい。この物語では、次のように解釈してみたい。

周の（大夫）其弘（周王室の音楽師で、孔子の音楽の先生であつたという）と、齊の高張は、

て天子の居城を築城し、たし、高子は人と約束にうむいた。云々

すものを支えることはできず、衆くの人です。と

という。一春秋左氏伝し世界古典文学全集筑摩書房、三六二頁、三六三頁注（一）、四〇三

と四〇四頁参照）

つまり、敬王十年十一月条の記事と、翌年の敬王十一年正月条の記事とは、

よく似てゐるといふよう。

これは、単なる重複であつて、どちらか一方が誤つて掲載されたのだから、

そうかも知れない。しかし、多少の違いもあるのだから、重出記事であるとして断言するのはむづかしい。

春秋左氏 362⁸ 上段 1行

春秋左氏 362⁸ 上段 1行

春秋左氏 363⁸ 注1

春秋左氏 高〇〇 という名多し。

洛陽内城の拡張工事

春秋左氏伝 定公元年（前五〇九）条から

成周の城壁の修復や天子の居城の築

高張は、ついに諸侯の築城の役に加わらな

た。と解される。

敬王が成周の城壁を修復しようとして晋に

使者を遣わしたのは、前五〇八年八月の事

であり、晋の魏献子（魏舒・魏子）が

諸侯の大夫を狄泉に集め、天子のように南面

して坐り、諸侯に役割りを言いわたした

のは、わずか三ヶ月後の十一月のことだった

それは、あまりにも急な召集であった。

天子の勅命を、広大な中国の各地に散らば

る諸侯にふれまわり、徹底するのは非常に困

難である。また工事に従事する人夫を集める

のに手間どって、止むなく遅れて来る者も

多かったように思われる。

者達 次々

559

前2頁

成周に城壁修復 401 1075-1/2 289

1074 179 179

天つき 改訂

1078-1/3

1075-1/2

777 1529 1095

改訂

1071

1078^p-2/3

こ

みやこ 古跡
京師 402^p 右 上 7^所
小林 85^p

成周城（最外郭城）が、またたくまに
修復されてゆく。その一方
で、遅れた諸侯の軍がぞくぞく
するという状況だったのであろう。
では、この遅れてやって来た者達をどう
すればよいのだろうか。何もさせずに
帰国させることが出来得ようか。

元 375P
か 掻き集む
所期の目的 1115P

元 1079P
x 28年 加5月 20日
x 28年 加5月 20日
1,079

元 1119P
1079-1/3
1079-1/3
1787

の彪侯が人に語りて
天子の居城を建てようというのに、諸
侯の臣が、先に続き「今再び」位を越えて命
令するのは、道義に反する。――（中略）――晋が
諸侯を失うようになるか、または魏子が助か
らぬか、いまだわからぬ。――（魏舒）
と言った。この築城のさいに焼き狩りをした
魏献子（魏舒）は、帰る途中、死んでしまっ
た。――
という意味なのであろう。
――異なる――
読みようによつて種々に解釈出来るのである。
つまり、この再度の成周での築城
は、最外外郭城の修復作業でなく、天子の
居城の南方部を拡張する工事だったのだろ
う、と想像される。
――
・ 成周（最外外郭城）を修復
する為、下人夫を掻き集め、はるばるやつて来
たものは、いさゝか少々渾水で都へ着いたため、所
期の目的を果たせなかつた。諸侯の大夫たち
へ、天子の居城（南宮）を築城する工事を
割り当てられた。――と推察される。

建設
仕事

孔子(前551~前479) ①1081 ②
前509 424
前551 13
③1077 ④1077 ⑤1077 ⑥1077 ⑦1077 ⑧1077 ⑨1077 ⑩1077 ⑪1077 ⑫1077 ⑬1077 ⑭1077 ⑮1077 ⑯1077 ⑰1077 ⑱1077 ⑲1077 ⑳1077 ㉑1077 ㉒1077 ㉓1077 ㉔1077 ㉕1077 ㉖1077 ㉗1077 ㉘1077 ㉙1077 ㉚1077 ㉛1077 ㉜1077 ㉝1077 ㉞1077 ㉟1077 ㊱1077 ㊲1077 ㊳1077 ㊴1077 ㊵1077 ㊶1077 ㊷1077 ㊸1077 ㊹1077 ㊺1077 ㊻1077 ㊼1077 ㊽1077 ㊾1077 ㊿1077

1080 春秋左氏伝 定公元年(前493) 13行

1089 春秋左氏伝 定公元年(前493) 404 1089 春秋左氏伝 定公元年(前493) 404 1089 春秋左氏伝 定公元年(前493) 404

同 ①1077 ②1077 ③1077 ④1077 ⑤1077 ⑥1077 ⑦1077 ⑧1077 ⑨1077 ⑩1077 ⑪1077 ⑫1077 ⑬1077 ⑭1077 ⑮1077 ⑯1077 ⑰1077 ⑱1077 ⑲1077 ⑳1077 ㉑1077 ㉒1077 ㉓1077 ㉔1077 ㉕1077 ㉖1077 ㉗1077 ㉘1077 ㉙1077 ㉚1077 ㉛1077 ㉜1077 ㉝1077 ㉞1077 ㉟1077 ㊱1077 ㊲1077 ㊳1077 ㊴1077 ㊵1077 ㊶1077 ㊷1077 ㊸1077 ㊹1077 ㊺1077 ㊻1077 ㊼1077 ㊽1077 ㊾1077 ㊿1077

とはいえ、この追加工事が誰の発想にな

るものなのかは定かでない。

①「敬王」の意向によるものだろうか。

②それとも、周王室の大夫(長弘)の提案なのか。

の先生であつたといふ「長弘」の提案なのか。

③いや、あるいは「孔子」の陰の助言が

なるほど断定はむづかしいが、

述べたように「春秋左氏伝」定公元年(前

五〇九)条には、こう記されてゐる。

「わが魯国からは」孟懿子が成周の築城

に参加した。庚寅の日に板田にて城壁を

築きはしめた。

驚くなかれ 築城は三十日間であつた、諸

侯の軍隊は歸らせられた。齊の高張は京師へ来

るのが遅れ、諸侯の築城の役に加わらなかつ

た。晋の叔寬は「さう言ふな」

周の(大夫)長弘と齊の高張はいふれも禍を免

れまい。長弘は天に誓ひ、成周に築城し

たし、高子は人との約束に背いた。期日た

と云つた」

1470
1404
1800
発案
5行と9行

④ 1077^D
- 1/3
657
の前509年

前五年正月、この晋の女叔寬の言葉から推して、
 へ周の大夫である萇弘（孔子の音楽の先生）が、
 九年正月に成周城内の日天子の
 居城を拡大するのを、晋の魏
 献子に見受けらる。恐らく、成周城修復の総指揮をとって来た晋
 の魏献子は、遅れて次から次へやって来る諸侯の軍をどのよう
 に扱ってよいのか困惑していたのであろう。そんな時、周の大夫萇弘提言があり、その案を採用することに魏献子は、諸侯の大夫たちを狄泉に集め、成周城内に日天子の居城（南宮）を築城することに当つたの区分を指示し、位を越えて命じたのであろう。

7月28日

① 1077
-1/3

1078² - 35149

むりやり
無理無理
元2161

前970
前510
260

東洋史 322° 320° (西周時代) は300年内
周公旦は前1100年ころの人
前270 前1041 1082

前970

前510

260

1083 3行

1072

前1100

前970

330

1074 3/2

左氏 401 F
16行

1075 1/2 2行

1077 1/3

か
すなわち
敬王が成周内の洛邑へ遷都した頃
にはすでに、
洛邑のまわりの成周城に殷民を縛りつけ
た理由そのものが、もはや消失していたの
成周城修復（前五一〇）まで、二六〇年ばかり
の年月が流れていて、――成周城内に殷
民達を無理やり住まわせなければならなかつ
た理由そのものが、もはや消失していたの
三代（の）郊野への東遷（前七七〇）まで、三
〇〇年程。さらに平王の東遷から、敬王の
成周城修復（前五一〇）まで、二六〇年ばかり
の年月が流れていて、――成周城内に殷
民達を無理やり住まわせなければならなかつ
敬王四年（前五一六）に敬王が遷都した当時
の成周（最外外郭城）は、かなり荒廃してい
たように思われる。（以下、巻頭の第4表、第6・7図参照）
成王（二代目）の成周築城から、平王（十
周公旦が城を建てて

一か―それにして、春秋左氏伝に昭公

三十二年（前五一〇）八月条に、

「成周の城壁を修復し、云々」

と記されているところをみると、

敬王四年（前五一六）に敬王が遷都した当時

の成周（最外外郭城）は、かなり荒廃してい

たように思われる。（以下、巻頭の第4表、第6・7図参照）

成王（二代目）の成周築城から、平王（十

周公旦が城を建てて

三代（の）郊野への東遷（前七七〇）まで、三

〇〇年程。さらに平王の東遷から、敬王の

成周城修復（前五一〇）まで、二六〇年ばかり

の年月が流れていて、――成周城内に殷

民達を無理やり住まわせなければならなかつ

た理由そのものが、もはや消失していたの

か
すなわち
敬王が成周内の洛邑へ遷都した頃

にはすでに、

洛邑のまわりの成周城に殷民を縛りつけ

果てて
この反2-3分

古代中国の都とその周辺
「名都洛陽」 3分27秒
2271

1082-2/2

「すでに」 1080'85
前注 1078'3/14分

小林
383

ておく必要性がすっかりなくなっ
て、成周へ最外郭城の城壁は崩れ、
果ててしまった。のたうう。
と推察される。
なにも、既に述べたように、
洛邑の内城、
体か、その外郭城、
取り囲む外郭城を備えており、
周の貴族達は、その外郭城の内に邸宅を
置いていた。のたうう。
へ、ええ、その外側に、最外外郭城と
うべき成周を必要とせず、
は、荒れるにまかされた。
と考える。
敬王の四年（前五十六）十一月
かし、敬王が成周に入、
成周・洛邑の
都とした時から以後、
名都洛陽と
様子は、大きく変貌し、
にふさわしい王都とな、
先ず、宮城（洛邑）のまわり、
果てていた成周内に、
うにな、たことであらうと思われ。

3008 ①355に 後漢書 ①-349 ①1046 ①1084 ①1077-1/2 ①1028 ①3788 ①1072

成周（最外外郭城）の修復工事に引き続
いて、成周内の王城（洛邑）の拡張工事もま
た完了した。である。（既述）
●もともと周初頃の理想的な王城は、
礼に示されて、前朝後市・左
祖右社・中央宮闕・左右民廛の原則とい
ゆる正方形の都城であった。（既述）
●そして、周公旦が築いた洛邑（内城）は、
大略その理想的な王城の構成通りであって、
ただ、左祖右社に無き都城（東都）
た。たのであらうと思われ。――
●ところが、敬王の十一年（前五〇九）、突
然にも、正方形の宮城（洛邑）が南方へ
大幅に拡大されて、九夫城と呼ばれる長
方形となった。たように想像される。（六三著）
●なお、歴代帝王宅京記に、雒陽、周
代の項の注は、雒陽城の規模について、
「城東西六里十一歩南北九里一百歩。晉元
康地道記曰、城内南北九里七十歩。東西六里
十七歩。為地三百頃一十二畝三十六歩」
北陽有威烈王冢」
と述べていて注目される。（古代中国の都市とその
周辺」服部克彦、ミネルヴァ書房、一〇頁。後漢書

→ H3. 9. 4 (水) ⑥

洛陽から315マイル ⑩1073¹/₁ 後漢(赤)1-349⁷

→ ⑩1075²/₂ 版

⑩1075²/₂ 版

1,085^P

⑩1045^P 新

⑩1046^P

郡国志、河南尹の条の注 **⑤** 参照)

・この文が、**「周代の項の注」**であるところ

をみると、

城内

へ周代末以前に**雒陽城**の**内城**は、正

方形から、**南北**が九里余り、**東西**が六

里余りの長方形の都城に**拡張**されていたの

だろう。 **「いわゆる九六城」と称する都城へ**

と思われる。 **(巻頭の第7図参照)**

狄泉 **介** 翟泉

米

後漢書 志第十九、郡国一に、

「雒陽ハ周時號成周。有狄泉在城中」

と記されている。 **〔文献〕④参照**

この物語において、**「雒陽」**は、**「成周城」**の中央に位置する

と考えてみた。 **第十四章へ成周城の修復**

また、**皇甫謐**の**「帝王世紀」**には、

「周の王室が定まり、ついに居所を成

西晋の學者 二五〇二八二

タイ 1063 1/2

1064 3/5 1064 3/4

昭儀寺にて 1058 東陽門 1086 洛陽カラニ記 18 383-1

水経注 1075 1934

周々うつゝたか、小さくて王都を受け入れな
いので、翟泉（狄泉）をこわしてこ水（王都）
を広げた。それで（翟泉の泉源は塞がれてし
まい、まったくもとの場所が分からなくなった）
とある。（「水経注」穀水条、洛陽伽藍記・水経注）
・察すると、
敬王は、居所を成周の内城へ遷したか、
小さくて王都を受け入れないので、内城へ
（洛邑）を南に広げた。この際、翟泉の
泉源が塞がれてしまい、元洛邑の南の端に有った
場所が全く分からなくなってしまった。
という意味なのであらうと思われる。
ということから、さらに推測する時、
へ、翟泉（狄泉）は、もとの王城（洛
邑、後の北宮城）の最南端部に在った。
のあらうと想到される。
■なお、洛陽伽藍記第一巻、城内、昭
儀尼寺、条には、東陽門（東面中央の門）内
一里の所、御道の南の地についで、
昭儀尼寺には池があったか、都の学生たち
は、それを翟泉と呼んでいた。
と記されている。（第十四章、洛陽の都の宮城内におよび
宮城外の項において既述）

⑦ $1064^{p-2/4}$ 1058^p の区

＊を待ちたい

要約すると
要旨をとりまとめた

周第六代

前領8行
1行

353P

小さく、王都と受け入れない。

1088P

解原京

北宮・南宮

ようするに

とあられ

敬王は居所を成周へ遷した。一かゝ成周へ

最外外郭城一内にあつた洛邑は小さくて王都

を受け入れないので、その規模を大きくする

改修工事が行なわれた。(2)周公旦

によつて築かれた正方形の洛邑は

九六城と呼ばれる長方形

の王城へ変貌をとげた

ということであらうと思われる。(巻頭の第6・7図参照)

の都城をみるに春秋・戦国時代における各国諸侯

はほぼ正確に長方形となるような形のものは殆

んどないという。(7古代中国の都市とその

周辺に服部克彦、ミナヅキ書房、一〇頁)

つまり、城の南北が九里あまり、東西が六

里あまりの長方形の都城であつた周の王城はこの

当時特異なものであつたとい

えよう。

*

九六城

史記(上) 卷大 134 上には
南宮とある。

……かゝると、この文が重複して
いるイメージが湧く。

① 周の大夫 周王室の音楽の師
- 3/3 所

二宮 が置かれた

こと

1089

六城 八と造り替えられた
 日南宮 口を包含する雄大な長方形の王城 日九
 提言 によつて、成周の内城は、日北宮
 子の先生であり周の大夫であつた「其弘」の
 へこの魯国の内城の構造が参考にした
 ① 詳らかでないが、
 と想像される。
 があつたのではなからうか
 時の魯国（孔子が仕えた国）との深い関り
 置かれた背景には、
 へ成周の内城に日北宮 日南宮 口の二宮が
 小林信明、小学館へ路寝（参照）
 書房、四二六頁、四二七頁注三「漢和辞典
 ということが分かる。（「春秋左氏伝」筑摩
 路寝（政治を行なう表御殿）があつた
 へ魯国の城に高寝（北宮の宮の名）およひ
 九五）条等から、
 ところ、春秋左氏伝 日定公十五年（前四
 春秋 403

春秋時代 1042^{P-23}
 春秋左氏 1076^P
 春秋左氏 48^P 下
 小林 末の96^P
 1089^{P-3/2} 1649
 1045^P
 1074^P
 1091^P
 1020^P 1437
 1021^P 1437
 1089^{P-3/2} 1649

「洛邑」から「王城」へ

先に述べたように、春秋左氏伝に「**莊公**

二十八年条には、

先祖の宗廟や先君の位牌があるものを

都」といい、無のをただ「邑」という

とある。(第十四章)「洛邑」「成周」「周」

公旦の起用」の項において既述

とすれば、敬王の時に宗廟や位牌が置かれて

ることになって、名実共に周(春秋時代後半)の

王都となった此城(洛邑)は、——「たい

何と呼ばれたのであろうか。昔のままだ「洛

邑」と呼ばれたはずはない。と見られる。

あるいは、春秋時代(前七七〇)前四〇三

もしくは前四五三(半ばの敬王四年(前五

一六)に天子の居城(廃絶された時以降、此城

(洛邑)は「周唯一」の王城となったから

したがって単に「王城」と呼ばれたのかも知

ない。但し、時には「洛陽宮城」と呼ばれた

後漢書に第十九、郡国一に、

とされ、王子朝の乱に終止符が打たれ(前五〇五)

郊廓の王城が

1092^P

[文献] ④1041^P タイム ④1061-1/2^P 15行
④1047^P 考察
版 ④1060^P 本~1061^P 4行

④1045^P ★ ④1045^P 本
④1060^P 本~1061^P 4行

河南^{かんえん}ハ 雒陽^{らくやう}ハ 周^{しゅう}時^じ號^{ごう}成^{せい}周^{しゅう}。有^{あり}狄^{てき}泉^{せん}在^{あり}城^{じやう}中^{ちゆう}。とある。[文献] ④参照
つまり、
へ 周公旦^{しゅうこうたん}が 城^{きやう}に いた 洛邑^{らくいつ}は、春秋^{しゅうしゅう}の 時^{とき}に 曰^い王^{おう}
城^{じやう}と 呼^よば れ た ✓
と いう の で あ る 。 (第 十 四 章 ハ 中 原^{ちゅうげん} の 王 城^{おうじやう} の 変遷^{へんせん} の 歴 史^{れきし}) ✓ 考察^{こうさつ} ④ において 既 述^{きじゆつ})

*
タイム
④1047^P
④1061-1/2^P
15行, 4行

本^{ほん} ④1044^P
王^{おう} 城^{じやう}

④1061-1/2^P 15行, 4行

かいや小林
贈 803^p (1042^p-2/3)
おすとおひり肉

大花かいや 読後によておめたるこ
1093^p
古代中国の

44^p 1000^p 1/2
1001^p 1/2, 1042^p-2/3

大花 時移り来る

トル

名都洛陽

通常

こうして時移り

日 戦国時代は前四〇三

もイくは前四五五と前二二一) となったと

き、—— 成周は、日 洛陽」という名に改称された

と考えられている(巻頭の第7図「古代中国の都市とその周辺」

服部克彦「ミネルヴァ書房」の頁「一五(行参照)」

ただ、もしかしなら、敬王が成周へ都を遷してまもなく、成周は洛陽に改称されたのかも知れない

この洛陽は、周末までその名声かうたれ

れた。日 名都洛陽」と呼ばれて

中国の歴史上にあって、日 名都洛陽」の称

は人々によく膾炙(広く知れわたること)さ

れた。という。古代中国の都市とその周辺に服

部克彦、ミネルヴァ書房、七八、八〇、八三、ハ

四頁。「北魏洛陽の社会と文化」服部克彦、

ミネルヴァ書房、八頁参照)

尚、この物語では、すでに述べたように、

へ周公旦が築いた日 成周は、最外外郭



⑩ 1045 新行
⑪ 1085 12行

春秋左傳「小」49巻 P
水経注 291^P 118432^号 1094^P
下1行 ⑩ 1077^号 14251^号 1/2-4^行

HU

トIV

城であり、初めから「洛邑」に（正方形の内城）
を内包していたのであらう。✓
と考へてきた。
とすれば、
「洛邑」を内城とする「成周」は、敬王の成周
への遷都以後「王城」と称され、
戦国時代には「洛陽」と改称された。
ということになる。✓
「成周」は「洛邑」および「成周」が共に「洛陽」と記されている例をあげてみよう。
① 水経注「洛水」の条に
「洛陽は周公が營んだところの洛邑である。
（中略）春秋にみえるように、昭公
三十二年、晋が諸侯の大夫を合して成周の
城を築き成ったので、その故にまた成周という」
とある。（「洛陽伽藍記・水経注」中国古典文学系、平凡社、二九一頁参照）
② 一方「後漢書」志第十九「郡国一」には、
「雒陽周時號成周。有狄泉在城中」
とある。（「受戒」④参照）
即ち、「水経注」と「後漢書」を併せ読む

中口の掛けの244⁸

1939 03 13

52

前頁 1095 95 1097 12 合水站。

~~244~~ 157

OK

はく 元 183 元
博 寸 1775 讀 称 922
得 3 183 9P 149 元 1775

カセウ
名 声 氏 2165^P
一 次 元 (3) 1092¹⁰ 1,095^P

72702

版部 83^P 119

$$1001^Y - \frac{1}{2}$$

317 320

244^P15

4

同時に成周とも號文水た

と
い
う
こ
と
に
な
る

そして、
こうい
わ水
てい
る

名都洛陽は、戦国時代における代表的な都

城
で
あり、
商
工業が盛ん
であつた
はかりで
な

く、当時の中国の精神的中心地としてもその

権威を誇った

周の世は、もうすでに名目のみと化し

[illegible]

日によつて築かれ、また敬王以後の歴代王者

の居所となつた洛陽は、いよいよその名声を

博し、曰名都洛陽と讚称されるまでの中国

民のあゝが水の都となつていた

という
↑↑↑↑↑
○
「
古代中国の都市とその周

辺
服部克彦、ミネルウア書房、九頁、~~八~~三頁

「中国のありほの」貝塚茂樹、河出書房、二二三

二四三(四)參照

ケ-20 20×20

一、各都府縣

元 266^P

307.9^p 1359

11K

東洋史 秦 358 p. 前256とあるが 前249より
前256とあるが 前249より
1108 1108 P 改行
1096 ~ 1107 飯番
今後 1089 - 1/2 147
とうせ 小林 828 P
董正 取り締る 元1627
洛陽から2309 P
郷=卿 洛陽から321 P 注16
HL

を封じて河南王とした。そして漢（前漢）
は、この地の河南にを河南郡とした。
王莽はまた、小を名づけて保忠信卿（郷）と
いった。後漢の光武は洛陽に都をおき尹
といた。尹とは正という意味で、京畿を董正
取り締ることし、白郡に率先するからである
という。洛陽伽藍記・水経注 中国古典文学大系、平凡社 三〇九頁
（参考）東洋史辞典・創元新社、八二頁（周代世系表）参照
このように、鄭・鄆・洛邑・成周、河南
の王城、等々の目まぐるしいばかりの字句が
出てくる。今後、どう位置づけられ
れることになるのだろうか。

周室の滅亡
名後は洛陽を王都としていたが、
週末期の第三十七代の王である赧王
（前三一五）前二五六）は、突如、再びもとの
王城へ都を遷した。（巻頭の第4表参照）
戦国時代の初め頃から、秦は富国強兵
策をとり、徐々（1925）に東方へ侵略し、領土を拡大
し、いよいよ不気味な存在となっていた。
そんな秦に對して、大きな脅威をいだいた

H18(2006) 10.13(金)

867
256
1123
武王 1100年
1109
145
1014
321
811
267
256
1123

中口の南都 18°
ヤマニ 861
50° 月と前
1017°

集英社 二四三 四頁参照

あった。へ「世界の歴史」(3) 黄河のほとり

松本雅明

周の赧王は「
て、まず攻守に便利な地の利をもつ郊鄆(ろ
陽西方の渭水の東にのこる巨大遺跡の地へ
赧王は諸侯と結んで秦を攻めた。
討った。たちまち昭襄王は、ただちに周を
はみむから秦へ走って、罪を謝した。こ
周の王室は、武王より三十七世、八六七年に
して滅亡した。それは、前二五六年のことで

*